

# 紹介

## 京都市史編年綱目第一卷

京都市史編纂の計畫せられて以來、多岐の學徒を擁して、長時日を費して事に當れる事情を聞くにつけても、その業績相ついで擧がりつゝあることを思はせたが、今度その最初の成果として、編年綱目第一卷が印刷に附せられ、一讀の機に恵まれた。收むるところ、神代より、康保四年 村上天皇崩御に至る間において、京都市に關係ある事柄を探り、更に市民生活と關係ある市周邊の事項に及ぶのであつて、體裁は、毎條の首に綱文を掲げ、次いで典故となれる史料の重要なものを録してゐる。その編纂趣旨は、例言によれば、本編の記述と相俟つて市の沿革を明らかならしむるものゝごとくである。斯かる企畫は、地方史の一般形式が、資料を内容に従ひ分かち、別に年表を編めるに對し、兩者を兼ねて而も新しい意義を具へたものとして注目すべきであらう。

編年綱目の形態のもつ意味について考へられることの一は、本編よりして、讀者は述者の意圖に導かれ教へられるところ多くあるに對し、この者にあつては、讀者自らの關心に従ひ歴史を組み立てる機會を與へられることである。即ち兩形態が讀者に對する働きには異なるものあり、後者は單に前者の補助的性質に止まるものではない。讀者はこの者において、自己の立場により市史を理

解し、更に本編の叙述により教へられるところ多きを期待し得るであらう。

而も、綱目の序列の裡にも、編者の意圖の示されるところはあり、本市が日本歴史展開の上にあつて中心的地位を占めた事情より、本書に收載せられた事項の選擇には、國史全體と關聯しつゝ、なほ市史としての獨自なる推移を示さうとする用意があり、夥しい資料の中より斯く要を盡してまとめられた編者の苦心を察せしめるものがある。

更にその用意は、特殊の現はれとして、克明に附せられた頭註の記載にも窺はれる。頭註はそれによつて資料の重點を示し、本編の内容をも推察せしめる働きをもつ。本書における記載様式がおほむね固有名詞の摘出に止まるは、檢索上の便宜を主とするに よるかとも思はれるが、本市に關係ある事項は細大洩らすことな く網羅して、斷片的資料のうちにも市の沿革を辿らうとする周到の配慮あるを多とするのである。

本文七五〇頁、外に別刷圖版七葉を附し、時局下稀に見る堂々たる裝幀は、優れた内容に錦上添花を添へるものと云へよう。國史への反省最も強く要請されるとき、その中核的存在たる本市史の編纂が、國運の隆昌に貢獻するところ極めて多きものあることを思ひ、その第一としての本書出版の盛舉を祝し、刷出を期待して蕪辭をつくれる次第である。(京都市發行 非賣品)(藤 直幹)

### 清朝史通論

内藤 虎次郎著